

名古屋市 地域療育センターだより

No. 3

正面壁画「友情」より

はじめに

所長 石川 道子

センターが開設したばかりの平成5年ごろは、「地域療育センターです」と名乗っても、「何ですか、もう一度おっしゃって下さい」と必ず言われました。間違って覚えられた名称も「知育教養センター」など、傑作がたくさんあります。センターのことをもっと知ってもらいたいと、昨年から、「地域療育センターだより」「連続講座」「療育体験」などに取り組んできました。もちろん、年月を重ねるうちに、巡回療育、電話連絡などで、センターをご存じの関係機関は徐々に増えていましたが、このような企画を始めたことで、センターの名前だけではなく、内容についても、少しずつわかっていただけたのではないかと思います。センターの仕事は多種多様です。また、皆様からの強い要請があって、新たに計画する事業もあります。できるだけ、センターの最新情報を知っていただくことが、地域でのネットワークが支障なく機能するための条件ではないでしょうか？と同様に、地域の情報も、センターが正確に把握することも必要です。今後とも、よろしくお願いします。

楽しかったセンター夏祭り



7月29日(土)の午後5時から恒例のセンター夏祭りが行われました。現在センターに通っているお子さんご家族、昨年まで通っていた卒退園児ご家族や近隣の方が440名程集まり、とても賑やかな夏祭りになりました。

遊びのコーナー、食べ物の模擬店、各関係団体のバザー、舞台での職員のショー、手話コーラス、和太鼓演奏、盆踊り、ホールでの人形劇と短い時間に盛りだくさんの行事が行われ、最後は園庭で花火を出して楽しい一日をしめくりました。

ご協力いただいたボランティアのみなさん、近隣のみなさんに心からお礼申し上げます。

特集 地域療育センター連続講座

地域療育センターでは、保育園、幼稚園、地域の療育関係者やボランティアの方々と、地域療育を取り巻く様々な課題について考える機会を持ちながら、地域療育体制の充実とネットワークの形成を図るため、連続講座を開催しています。昨年度の9月に第1回講座を開き、その後も回を重ねるごとに多数のご参加をいただいています。今回は平成11年度第3回と平成12年度第1回講座の内容概略を掲載します。



連続講座 平成11年度第3回

— 社会性の発達 —

地域療育センター心理士 堀部文男

子どもの発達を考える時に、a) 身体的な成長・健康の確保、b) 運動の発達、c) 感覚・知覚の発達、d) 言語の発達、e) 概念形成の発達、d) 情緒・社会性の発達という分け方ができると思いますが、その中の情緒・社会性の発達について少し考えてみます。

子どもの情緒の分化

ブリッジスの情緒の分化図式という有名な図がありますが、それによれば生まれたばかりの赤ちゃんには、まず興奮が最初にあり、それから不快が分かれ、その次に快という情緒が生じてきます。非常に障害の重いお子さんのお母さんから「うちの子は2歳になったのに、泣くのだけれど笑わないんです。」との訴えがあり、センターの療育グループに通って来るうちにだんだん笑顔が見られるようになることなどから、不快が快に先行していることを実感することもあります。生後6ヶ月ごろから恐れ、怒りが分化してきて、「人見知り」が始まるのもこの頃です。1歳ぐらいになると快から「得意」が分化してきます。この「得意」の感情は、日常の保育の中で集団の規律を身に付けていくのに役に立ちます。

心の層構造

次に心の層構造というものを見てみます。心についてフロイトの言う意識・前意識・無意識が層をなしていると考えていきますと、昼間の意識清明な時は、意識の部分を普通の自分だと思っているのですが、自分では抑圧してしまって意識することのない無意識の部分も人の行動、意識に大きな影響を与えていることになります。社会性の発達という点から言うなら、心全体がコントロールできない状態は望ましいことではなく、意識的な行動に視点を当てて指導していくことになりますが、小さな子ども、発達の遅い子どもたちは、あまり意識しないで行動することが多いと思います。子どもの無意識的な行動には、まず熱い物に触れたら手を引っ込めるような反射的な行動、それより少し高次なものと考えられる模倣的な行動があります。その次に自分の心全体をコントロールできる主体ができてくると要求・拒否・自己主張といったことができるようになり、さらに相手のことを理解できる力がついてくると、相手のことを考えた上で会話・報告・説明・交渉といったことができるようになってきます。無意識的な行動か

ら成長につれてより意識的なものへと分化した行動ができるようになっていくと考えられます。

体験の系列

出生から死に至る人間の体験は、ブリッジスのいう情緒の種類ごとに蓄積されて整理されていきます。そのことを考えるのに私は自分で「体験の系列」という言葉を作ってみました。乳児期、幼児期、大きくなってからという段階に応じて、それぞれ授乳の体験、養育の体験、社会体験を積み重ねていくのですが、その中で辛い体験や嫌だったことの系列と楽しい体験や面白かったことの系列が生まれます。例えば、乳児期の空腹なのに乳がもらえない、満腹なのに無理に与えられたという体験、それとは反対に空腹時にそんなに泣かなくても授乳を受けた体験、それと同じ種類の体験を幼児期には養育の体験として、大きくなってからは社会体験として重ねていきます。辛い体験が多い場合には欠乏への恐怖心、楽しい体験が多い場合には充足した満足感に至る系列になります。どちらか一方だけの体験だけの人はいません。どちらの系列の体験を誰でもするのですが、辛い体験があまりに多いとその時期は統合されない形で無意識の中にしまいこまれてしまい、逆に楽しい体験が多ければ、全部の体験をよい体験を中心に統合していくことができ、乳幼児の人格も統合されていきます。

幼児期のパニック時の赤ちゃんっぽい行動なんかは、子どもは現在の不安だけでなく、乳児期の欠乏への恐怖感といった情緒も引き出されて深刻な状態になっているんだなという理解の仕方もある訳ですが、ここで保育者の方に知っていただきたいのは、辛い体験は養育者側だけに原因があるというものではないということです。特に発達に障害のある子には感覚の異常、器質的な問題、対人関係そのものに障害があるなどの

原因で辛い体験をすることになります。お母さんに乳児期の育児方法が現在の問題を生じさせているように感じさせる話し方は注意しなければならないと思います。

こころの部屋

次に「こころの部屋」の話をします。大人で言う場面によって言葉遣いや緊張感が違うなど自分でも感じますが、その場面、場面を「部屋」に例えてみた言い方です。その「部屋」には自分が育った過去の場面もあります。最初にできる「部屋」は赤ちゃんの時のどこから自分でどこから周囲なのかも判らない混沌とした状態です。次にお母さんの「部屋」が別れ、お父さんや兄弟、他の家族との母親とは違う付き合い方を覚えて「部屋」を増やしていきます。幼稚園や保育園に入ればお母さんのいない場面で担任の先生やお友達との付き合い方を覚えていきます。社会性が発達していくということは、この「部屋」の数が増えていくことだと言えます。その場合、「部屋」ごとにルールが違うことを知り、自分を使い分けられること、一番大きな「部屋」が他の「部屋」に居られなくなった時に逃げ込められる程しっかりしていること、「部屋」がなるべく同一敷地内にあって人格が統合しやすい状況になっていることが大切だと考えています。

終わりに

社会性の発達ということでお話ししてきましたが、じゃあどうすればいいのかはとても難しく、これで解決しますということはないようです。現実の子どもの姿をより深く理解して、見当違いの対応をしたり、今までの生育歴をふまえないような援助を保護者にしたりしていないかを絶えず確認していくことができればよいのではないかと思います。

連続講座 平成12年度第1回（平成11年度第1回の続編）

— 広汎性発達障害(PDD)の理解を深めるために —

地域療育センター所長 石川道子（小児科医）

11年9月30日の講演の内容と一部重複しますが、続きをお話していこうと思います。

PDDは自閉症の拡大概念

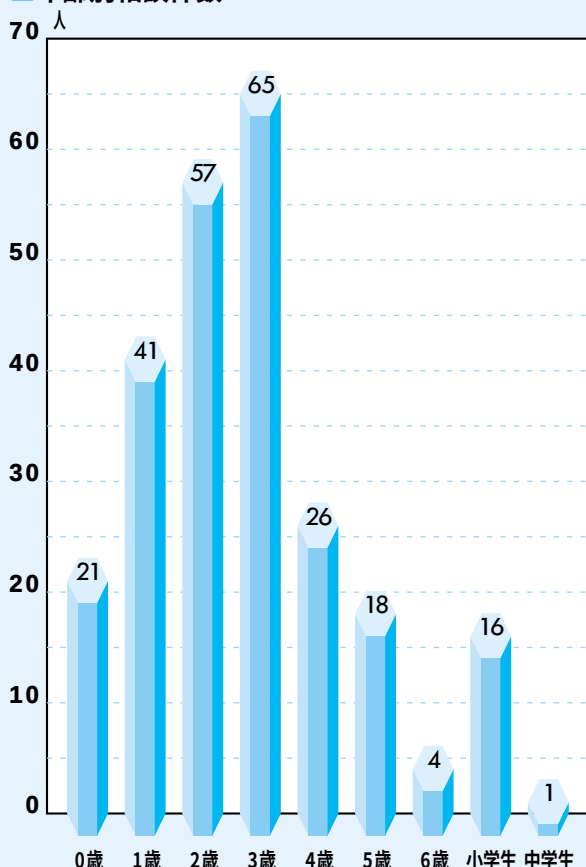
PDDは自閉症の拡大概念とすることができます。

①対人相互反応の障害 ②コミュニケーション（ことば、表情、身振りを含む）の障害 ③興味の限局、こだわりの三つがどの年齢でも、またどの人から見ても満たしているのが自閉症で、一部欠けていても、大まかにあてはまるのがPDD、あるいは一時期にはあてはまらないが、別の時期にはあてはまるのがPDDと言えます。なかなかわかりづらい自閉症の子の

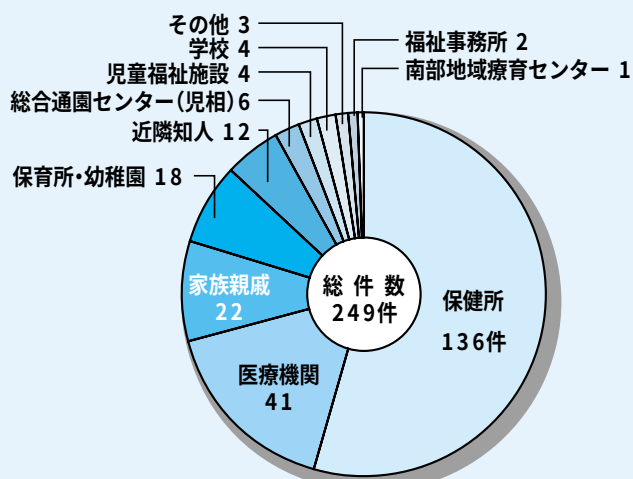
認知の仕方を教えてくれるのが、PDDの子です。PDDの子は人をとらえるよりも室内のドアがちゃんと閉まっているかどうか気になります。ですから、人にあいさつする前に、ドアをまず閉めに行きます。PDDの子は人に対する認識で調子のわるいところがあります。人見知りが全く出てこない、あるいは極端な反応になります。ある人は美容院に行って髪形を変えた母親に対して人見知りをしました。また友達というのが楽しみなところがあります。人に関する情報処理が苦手で、他人が考えていること、信じていることがわからない、というところがあります。

平成11年度新規相談

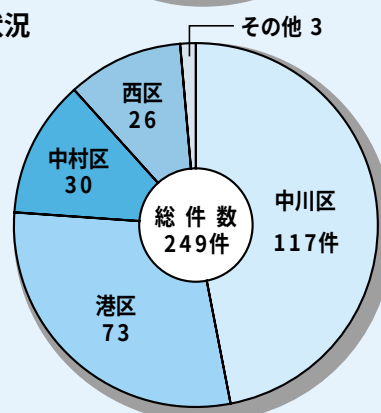
■年齢別相談件数



■センターへの紹介状況



■区別相談状況



「サリーとアンの実験」

有名な「サリーとアンの実験」というものがあります。サリーはアンが知らない間にボールの位置を変えてしまいますが、PDDの子に「アンはどこにボールがあると思っていますか？」と聞くと、サリーが変えたあとの場所を答えてしまいます。一般の子どもでは4歳の子で正しく、変える前の場所を答えられます。しかし6歳の知能を持つPDDの子は通過できません。またダウン症の子で、6歳の知能を有する子に尋ねますと正しく答えることができました。PDDの子では10歳になると正しく答えられる子が出てきます。どうやってわかったかを聞くと不完全な理屈で正解に至ったことがわかっています。このように他人の心が読み取れないという障害を持っています。この課題ができるようになって現実場面では適応できないことが多いようです。また現場でわかっていてもタイミングが遅いということがあるようです。

認知の仕方はスポットライト的

またPDDの子は、集中すると周りが見えなくなることがあります。すごく気になる物を一点集中で見、周囲を見ていません。「スポットライト的」と言われています。また覚えているもの、覚えていないものの差がはっきりしています。ビデオやCDの操作など物に関するものは上手ですが、人に関するものは覚えていないことが多いようです。

PDDの子は100人に1人くらい

1996年ごろからPDDの子が増えてきたように思います。地域療育センターの初診におけるPDDの割合は1995年ごろまでは全体の20%ぐらいでしたが、最近では40%前後になってきています。また市大病院での割合も倍増しています。他のMR(知的障害)、LD(学習障害)、ADHD(注意欠陥多動障害)などの比率は変わっていません。最近では出現頻度は100人に1人ぐらいではないかと考えています。

発見や診断が必要な理由

発見や診断が必要な理由は次のように考えられます。例えば誤った接し方に陥るのを防ぐことができます。保護者は「親の接し方でこうなっているのではないか。」と考えます。なるべく自由にさせてあげて、スキンシップや親の愛情をたくさんかけてあげればいいのではないだろうか、と思って接しますので普通の文化と違った生き方を子どもが身に付けていくことになってしまいます。

また知的な遅れが少ないほど発見が遅れるようです。保健所でのチェックにおいて、言葉の量的な出方についてだけ見ているとよくありません。普通は始語は「マンマ。」とか「ブーブー。」などであることが多いのですが、「ネスカフェ。」とか「ET。」といった固有名詞から始まるというような変わったところがあります。また応答性に弱く、質問された時に答えてくれません。

PDDの子は集団の中で目立つ

PDDの子はセンターの個別の発達検査の場面では比較的よい成績を示すことが多いのです。しかし集団生活では適応できていないことがしばしばあります。これは巡回に行くようになって初めてわかりました。大人のPDDの人と話してわかったのですが、あるPDDの大人の人はマンツウマンでしゃべるのは理解できるのですが、多人数でコミュニケーションしている時には、誰が誰に話しているのか、わからない、といいます。一般の人は目付き、表情、話題の流れで、会話が誰に対してなされているのか解釈していきますが、PDDの人にとってはそれが困難なようです。集団の中で複数の声が飛び交う時に情報の処理ができないようです。ですから園でも先生から「～ちゃん!」と注意を促して、個別に抜き出して言わないと通じない、ということができると思います。

具体的な対応

① 枠を入れる。予定がはっきりした方が動きが安

定します。

- ②否定語、禁止語はなるべく使わない。「～だからダメ!」
と言っても、「～だから」の部分よりも「ダメ!」だ
けに反応してしまいます。できるだけ肯定形で伝
えるとよいのです。
- ③目で見えてわかるように。注意をひきつけるように
見せます。現物を見せるとわかりやすいのです。(④
～⑨は略)

熱心で指導がうまいと思っている先生はうまくいか
ないことが多いと思います。先生の方は、こんなに子
どものことを思っているのだから、子どもの方が自分
のことを思っていないのはおかしい、と考えて行動し

ますからトラブルになりやすいのです。案外「自分は自分、
人は人。」と思っている先生の方がうまくいくことが多
いようです。

一人の先生が全部を担当しない方がいいとも言え
ます。一人はなだめ役をし、もう一人は粹を伝える役
を担当するのです。

また園が全部の役割を担当しない方がいいと思います。
園の先生は「お母さんの味方」という立場を保ってほ
しいので、自閉症とかPDDという言葉は使わない方が
いいでしょう。「子どもの指導をやっていくのは園の役割」、
「保護者に子どもの理解をすすめていくのは地域療育
センターの役割」と分担した方がいいと思います。

次回連続講座のご案内

平成12年度 第3回 懇話会 テーマ「幼児期の言葉と発達をめぐって」

懇話者 皇學館大学社会福祉学部 松下 淑 氏

日 時 平成12年10月20日(金) PM3:30～5:00

場 所 地域療育センター多目的ホール

ボランティア募集

センター行事(運動会、夏祭りなど)のお手伝い
保育場面での手助け(室内の活動、園外への散歩など)
教材づくり
保護者の送迎のお手伝い
保護者活動時における療育児のきょうだいの保育
その他、園の環境整備など

■お問合せ・お申込み■
名古屋市地域療育センター

名古屋市地域療育センターだより 第3号

発行日 2000年9月28日

編集・発行 **名古屋市地域療育センター**

〒454-0828 名古屋市中川区小本一丁目20-48

Tel. (052)361-9555 Fax. (052)361-9560

この機関紙は再生紙(古紙配合率
100%、白色度80%)を使用し
ています。

